

# 西照

西照寺寺報「さいしょう」

第 20 号

2008 年 1 月 5 日

発行 浄土真宗本願寺派 西照寺

高岡市吉久 2 丁目 4-40

hp nisitera.eek.jp

## 御正忌報恩講勤修

左記のとおり御正忌をお勤めいたします。

お参りくださいませ。

おつとめの時間

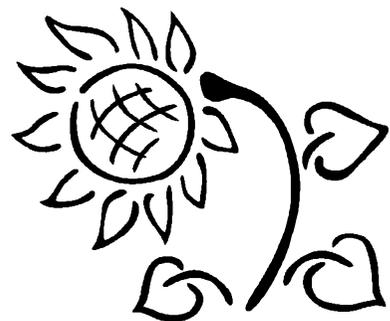
一月十五日 午後二時(御逮夜) 〳

午後七時(御初夜) 〳

十六日 午前九時半(満日中) 〳

布教使 矢口千代磨師 (羽咋郡志賀町光念寺住職)

西谷山 西照寺



## いのちは誰れのものか

ある中年の男性と、人間死んだらどうなるんだろうか、という話になったことがあります。

a 「ごんげ（権現）はん、人間死んだらおしまいでないけ。何も無くなってしもちや。みんなそう思うとつがいね。そやさかい、元氣な間に楽しまんなんちゃ」

b 「そういう気持ちも分からんことないけど、死んだら何も無くなるというのちや。ちよつと言い過ぎでないけ」

a 「そんながなら何けごんげはん、死んだら靈魂でも残るちゆがけ」

b 「靈魂なんかならんちや。念仏に生きるも者は仏様にならしてもらがやさかいに……」

そんな話じゃなくてね。大体、命いのちちや自分のものでないねか、自分の思い通りにならんのやさかい。思い通りにならんもんは自分のもんでなかるがいね。」

a 「なら、誰のもんながね」

b 「仏さんのもんや」

「……………」

うまくその意味を伝えきれず、話はそこで止まってしまいました。

大抵の人は、自分の命は自分のものだと思っています。一面ではその通りです。しかし、また一面では、自分の命でないことも事実です。葬儀におまいりするたびに、いつもそのことを思い知らされます。

私でしたら、寺の息子に生まれようと思ったのでもないのに生まれてきてしまった。人間は生まれる環境を自分では選べません。せつかく生まれてきたのだから、いつまでも、若くて健康で長生きしたいと思っても、病気になり年をとって、自分の意思とは関係なく、やがて、或いは突然に死なねばならない命を生きています。あるいは、心臓ひとつ自分の意志で動かしているわけではありません。

自分の命でないからです。

大自然の恵み、いろんなはたらきや支えの中で生かされているのであって、自分一人では生きられません。

ですから、自分のものと思っている命と自分のものでない何か（命）を同時に生きているというのが事実ではないでしょうか。

## 二つのいのち

仏教で命については、概略このように教えていると思います。

命には、目に見える（形ある）命と目に見えない（形なき）命がある。形ある物質的命を支えているのは、目に見えない命であって、目

## くみょうちよう 共命鳥

仏様のお国であるお浄土には、妙なる鳥がたくさんいて、その中に共命鳥という鳥がいますと阿弥陀経に書かれています。

どういう鳥かというと、体が一つで、頭と心は二つあるという奇妙な鳥です。しかも、顔つきは人間に似ているようです。頭が二つ、心が二つという鳥だから、考えることも、食べ物の好みも違う。おまけに体が一つしかないのでもく空を飛ぶことができません。飛ぶ方向が同じときはまだよいのですが、右と左に分かれて飛びたいと思うと、もういけません。バランスが崩れて、落ちてしまうのです。

ある時、それぞれの言い争いが起きました。

「おれはいつも、うまい物を食べ、平和に暮らしたいと思っている」「偉そうなことを言うな。お前はいつだってうまい物を食ってるくせに、このおれには一度たりともくれたことがないじゃないか」

「お前が、おれに逆らってばかりいるからだ。おれが右へ行こうと言っているのに、お前は左へ行くと行って譲らない。平和に仲良く暮らそうと言っても、お前はちつとも言うことを聞かないではないか。ひねくれているお前がいけないのだ」

すると、ひねくれていると言われたほうはカツと頭にきた。

「自分一人がいい子になって、おれをばかにしてやがる。いまいまいやつめ、お前なんか殺してやる」  
(裏面に続く)

に見えない命こそ、いのちの根源であり大地の世界である。その大地の世界では、それこそ宇宙が一つであるような、つながりとひろがりをもった永遠の命であり、我々はそういう形なき命の世界から、形ある物質的命に生まれてきて、そしてまた形なき命の世界に帰って行く。その命の根源の世界を釈尊は、「縁起えんぎ」とか「真如しんじゆ」「一如いちじゆ」という言葉で表現してくださいました。

また、こんな説き方もされています。例えば地面に一輪の花が咲いている。ひまわりにしましょう。我々は地面から生えている部分だけを、ひまわりだ、ひまわりの命だと思いがちです。ところが、ひまわりは、大地に根をはり、水を補給しなければ、倒れてしまいます。つまり、大地とひとつの命を生きている。雨が降らなければ、二酸化炭素が無ければ生きられない。地球とひとつにつながっています。また、太陽が無ければ、光合成もできないから、宇宙ともひとつにつながっている。

一面では、地面から上だけがひまわりの命といえますが、同時にその根源は宇宙がひとつであるような命を生きている。そういう二つの命を同時に生きているということがあるわけです。人間にも同じことが当てはまります。



そう思った方の頭は、もう一方の頭に毒草を食べさせました。

興奮して体が一つしかないということのを忘れしまったのでしよう。哀

れなことに、身に毒が回って二羽とも死んで

しまった。

そのようなことが雑宝蔵経に書かれています。

このお話は、命ということについて大切なことを私たちに教えてくれます。

それは、私たちは、お互いバラバラに自分一人だけの命を生きているように思いがちですが、命の本体では、ひとつにつながっている命を生きているということです。

分かりやすくするために単位を小さくして、家族ということで考えてみるとどうでしょう。

表面上は、身体も別ですし、バラバラに生きていくようにも見えます。しかし、目には見えないけれど命の根っ子では、家族みんなが一つであるような命を

め直し、命の根源から、私の生きる意味と使命を問い聞いていく営み

であるともいえます。(文責 住職)

苦楽であるような、そういう生き様。自分の生きるよろこびや使命も

命の根っ子である家族はみんなが一つであるという精神からくみと

っていることも多いのではないのでしょうか。

この命の根っ子では、家族は一つにつながっているということは、割合気づきやすいことです。それが、無限のつながりとひろがりを持つている。生きとし生けるものはみんな命の根っ子では一つにつながっている。そう気づいた方を仏といふのでしよう。だから、阿弥陀仏は、十方衆生すべての人が救わなければ、私は仏とならないとおっしゃった。

目には見えないが、命の根源では、すべての人が一つにつながっており、すべての人が救われるようにと願うことが、私の願いや使命の本源である。そのことを知らせてくれる働きが、念仏という言葉となって私に届けられているわけです。

念仏申すということは、私の命の全体像を見つ



共命鳥